

語ろう・紡ごう、だんだんの

縁を世界へ

男女共同参画 「日本女性会議2011松江」参加報告

10月14日・15日の2日間、くにびきメッセ・松江テルサにおいて日本女性会議2011松江大会が「語ろう・紡ごう、だんだん」の縁を世界へ」をテーマに全国から約2200人の参加者のもと開催されました。日本女性会議は、毎年各都市が開催を引き継ぎ、全ての人が個人として尊重される男女共同参画社会の実現をめざして開催されるものです。

14日は、「家族とジェンダー」・「超高齢社会を切り拓く」などの10の分科会が行われ、15日の全大会では、「国の男女共同参画施策の現状と今後の課題について」の基調報告と、「エプロンはずして夢の山」と題して、女性初の世界最高峰エベレスト登頂者 田部井淳子さんの講演がありました。岩美町からは、11名参加いたしました。

「日本女性会議2011松江」に参加して

女性団体連絡協議会会長 山田 恭子

登山家田部井さんの「エプロンはずして夢の山」と題してのユーモアたっぷりのお話は、おもいきり笑いながらも男女共同参画についてのつぼをしっかり押さえた内容でした。何よりも女だから出来ないと思いきらめることなく、夢を実現するために努

かし続けければ、夢は必ず叶うと教えられました。

国連が1975年を「国際女性年」、1976年から「国連女性の10年」として以来、世界中の国々で男女共同参画の実現に向けた取り組みが行われ、日本でも女子差別撤廃条約を批准し、「男女共同参画社会基本法」の成立、「男女共同参画基本計画」の策定等、着実に取り組みが進められているものの、男女共同参画の現状は道半ばの状況にあり多くの課題が指摘されています。

実際の生活でも、未だ性別役割分担意識が強くあり、必ずしも男女共同参画が十分進んでいない現実があると思う今日、多くの課題を確認しながら、解決に向けた明日からの具体的な取り組みについてのヒントをいただき、この大会に後押しされました。分科会での、「国境を越えて女性からはじめられる新しい生きかた」グローバルシジョンと共生社会」では、女性の声が社会を変えた韓国の実態に感銘を受けました。

男女共同参画社会とは、なかなか分かりにくいと思いますが、自分らしく輝いて生きるために大切なのは、「元氣と勇氣と本氣」だとそれぞれの人が教えてくれた大会でした。

人権学習シリーズ 92

無知が生む「風評」

10月中旬、ハンセン病（平成8年までの病名は「らい」）について学ぶ機会を得て、国立療養所長島愛生園（岡山県瀬戸内市）を訪問しました。

医学知識の不足や国策（強制隔離）等により、患者の方の尊い命が奪われたり、自己実現の機会が阻まれた事例を通して、人権を尊重する社会の実現に向けた取り組みの大切さを再認識しました。

ご存じのように、ハンセン病は、「らい菌」による慢性の細菌感染症です。現在は薬で完治しますが、明治後期の医療技術の未熟さや日常生活の衛生・栄養状態の悪さにより、治らない病氣・感染する怖い病氣と受け止められました。患者本人や家族は偏見と差別を被ってきました。あげくは前世の悪行の報いによる業病であるとか遺伝病である等がまことしやかに囁かれました。

症状は見えても、医学的解明が遅れたため、感染原因や治療方法等が分からない等、無知であることで流言の温床になったかもしれません。

さて、根拠のない流言は「風評」です。福島第一原子力発電所事故に起因する風評の件や対象が広がりとりません。

例えば避難直後の女子児童は、「福島県から来た」と、級友から避けられたり陰口を言われたこと。いわき市の運送会社が「放射能の問題があるので、いわきナンバーで来店しないでほしい」と、取引先に言われたこと。夏の伝統行事「京都五山の送り火」で使用予定であった陸前高田市の薪を放射能汚染の恐れがあるとの指摘により使用を変更したこと。秋には、政府高官の心無い発言や富士山への外国人観光客が大幅に減少等がありました。これらは、いずれも風評被害を被ったことです。

これまで、無知であるが故に「風評」を結果的に受け入れてきたことを振り返り、今後は、「被爆」に関する正しい知識を持ち、見た目や先入観で判断しないことが大切と受け止めています。（人権教育推進員）